**第25課　奇跡を創造する信仰 2018.6.24**

◎ 賛美(一同) : 韓日401番、聖歌539番(韓日344番)

◎ 信仰告白(一同) : 使徒信条 ◎ 御言葉朗読(一同) : エステル4章13～16節

◎ 本文朗読 ◎ 主の祈り(一同) : 一番最後に

◎ **今日のマナ**神様が定められた70年の捕虜期間が過ぎて後、神様はペルシヤ帝国を引き起こし、バベロンを征服するようにさせ、ユダの民が帰還出来るようになされました。しかし3次に渡って成された捕虜帰還の中でユダの民全体が死の危機に置かれた時がありました。このような危機が私たちの前にも迫ってくることがあります。しかし、神様に祈り進み行くなら、危機から救われる神様の軌跡を体験することが出来ます。

1. **義人が受ける苦難**

ペルシヤ帝国のアハシュエロスは、エジプトからインドまで127の州を治める王でありました。彼は即位3年に帝国の裕福さと威厳を誇示するために180日間大な祭りを開きました。 そして祭りの最後の日、王妃ワシュティの美しさを人々に見せるために王妃を呼びました。 しかし王妃が自身の命令を拒んで出てこないので、アハシュエロス王は怒り、ワシュティを廃位させて全国の美しい女の子たちの中から王妃を選ぶようにしました。 この時、エステルが王妃で選ばれることになりました。

当時、アハシュエロス王はハマンという家来をとても寵愛し、すべての大臣たちよりも彼の地位を高めて彼にひざまずいてお辞儀をするようにしました。しかし宮殿の門番として仕事をしていたエステルのいとこの兄、モルデカイは彼にお辞儀をしませんでした。 ただ唯一なる神様にだけ仕えたモルデカイはたとえ王の命令であろうともハマンにお辞儀をすることが出来なかったのです。

するとハマンは自身にお辞儀をしないモルデカイを殺そうと自身の家に高い柱をたてました。そしてモルデカイがユダヤ人であることを知って王からペルシヤのすべてのユダヤ人を殺すようにとの文書を受けて全国に頒布しました（エステル3:13～14)。王の調書が頒布されるやユダヤ人は全部身動きもせず死ぬことになりました。 捕虜期間が終わりエルサレムに帰還していた時に突然、全民族が虐殺される危機に陥ったのでした。

このように、信仰の中で、正しく敬虔に生きようと思う人々に、時に多くの苦難があります(Ⅱテモテ3:12)。しかし、私たちは苦難と迫害があるといっても決して妥協してはいけません。神様が獅子の穴からダニエルを救い出されたように、私たちを苦難の中から必ず救い出して下さいます。したがって私たちは世の中の富貴と栄華と成功のために、義に徹して生きるということを諦めずに、苦難の中でも最後まで信仰の節操を守ることによって、神様の前に正しい生活を送らなければなりません。

1. ‘**死ななければならないのでしたら、死にます’の信仰**

王の調書が全国に広がり、ユダ民族は虐殺される危機に置かれて、ユダ人たちは皆、断食して神様に叫んで祈りました（エステル4:3)。モルデカイはエステルに伝言を送り、ユダ民族が死の危機に処したのを知らせて王の前に行って民族を救うようにいいました。しかし当時、王の前に進むのは容易なことではありませんでした。王が呼ばない者が自ら王の前に出た時、王が金の笏を差し出さなければ、死を免じられることができなかったためです。

これによってエステルはすべての民たちに断食をお願いし、自分も三日間断食した後、‘死ななければならないのでしたら、死にます’という覚悟で王のもとに行きました(エステル4:15～16)。このように私たちの前に問題と危機がある時、私たちは断食して祈らなくてはいけません。祈りだけが私たちの生きる道だからです。‘死ななければならないのでしたら、死にます’は覚悟を持って祈り、進み行くなら、神様は状況を逆転させて奇跡を起こして下さいます。 詩編50編15節は“苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」”と語っています。いかなる危機や苦難に処しているとしても気をおとさずに叫んで祈り、神様の助けを求めなくてはいけません。そうする時神様の驚くべき奇跡の恵みを体験する事が出来ます。

**3.歴史を主管される神様**

エステルが王妃の衣装を着て愛らしい姿で王の庭に立っているのを見たアハシュエロス王は、金の笏を差し出し、エステルを喜んで迎えました(エステル5:2)。王のお呼び無しに王のもとへと進み出たエステルに対して王が金の笏を差し出したことは神様のお働きでした。神様が王の心を動かしたのです。その上、王は予告なしに訪ねてきたエステルが、自身に緊要な話があるということに気づいて彼女に願いを尋ねました(エステル5:3)。王の問いに対してエステルは、自身がユダ人であることを明かし、自身の民族の命を助けてくれるようにと懇願しました。そして、ユダ人たちを滅ぼそうとする陰謀を計画した者がハマンであることを告げました。エステルの言葉を聞いたハマンは、エステルが座っていた長いすの上にひれ伏して命乞いをしました。しかし王はこの行動を王妃に乱暴をしようとしていると思い、ハマンがモルデカイをかけるために準備した50キュビトの高さの柱にハマンをかけるように命令しました(エステル7:9∼10)。

ハマンを柱にかけて後、王は新しい詔書を下し、ユダの人々のいのちを守るようにし、モルデカイにハマンの財産と地位を与えました(エステル9:4)。その年のユダの暦で12月13日はハマンがくじを引いてユダの民を滅ぼそうとしていた日でした。しかし反対に、ユダの民がハマンの十人の息子を含む7万5千人もの彼らの敵を滅ぼす日となりました。神様は、そのすべての状況を変化させ、涙と嘆きを喜びと賛美へと変えられたのです。

ユダの民が危機状況の中で断食し祈ったように、私たちもまた苦しみに会う時に祈り、神様のもとに進み行かなくてはいけません。そうするならば、歴史を主管される神様が私たちを危機から救い出し、私たちの行く道を導かれます。今、一寸前も見ることのできない問題に囲まれているとしても神様の祝福が私たちを待っているということを覚えていなくてはいけません。いかなる状況が差し迫ろうとも、エステルとともに‘死ななければならないのでしたら、死にますという信仰で前進する私たち皆になるように願います。

◎ マナの要約

<義人が受ける苦難>

1. ただ神様だけに仕えていたモルデカイはハマンにひざまずいてお辞儀をしませんでした。

2. ハマンはモルデカイとすべてのユダヤ人を殺す計画を立てました。

3. 義人には時に苦難がありますが、苦難に屈することなく最後まで信仰の節操を守らなくてはいけません。<‘死ななければならないのでしたら、死にます’の信仰>

1. すべてのユダヤ人が死ぬという危機に置かれ、彼らは神様に断食しながら祈りました。

2. エステルは三日間断食して後、‘死ななければならないのでしたら、死にます’の覚悟を持って王の前に進み出ていきました。

3. どのような危機が迫り来ようとも落胆することなく神様に叫び祈らなくてはいけません。

<歴史を主管される神様>

1. アハシュエロス王がエステルに金の笏を差し出した事は神様の働きでした。

2. 神様はユダの人々の祈りを聞かれ、涙と嘆きを喜びと賛美に変えてくださいました。

3. 私たちが祈る時、歴史を主管される神様が私たちを危機から救い出されます。

◎ 人生の中のマナ

<隣の人と挨拶>　1. 苦難の中でも信仰の節操を守りましょう。2. 落胆せずに祈りましょう。

3. 最後まで神様だけをつかみましょう。

<祈り>

1. どのような苦難にも妥協することのない信仰を持つことが出来るように祈りましょう。

2. 現在、苦しい状況に置かれているならばその問題解決のために神様に断食して祈りましょう。

3. 私たちの涙と嘆きを喜びと賛美に変えてくださる神様に感謝の祈りを捧げましょう。

<とりなしの祈り>隣の人と祈りの課題を分かち合って共に祈りましょう。